

## 安積、愛媛松山、漱石、そして仙台

校長 久保田範夫

昨年七月四日の仙台安積桑野会平成二十七年度定期総会では、山口孝夫副会長（七十六期）、野内明校内幹事（九十七期）ともども大変お世話になりました。現役の大学生も多数出席して、非常に心地よい充実した時間を過ごすことができましたことに重ねて御礼申し上げます。

さて、安積は平成二十八年度に創立百三十二周年を迎えますが、夏目漱石が大正五（一九一六）年十二月九日に永眠して、没後百年に当たる年でもあります。様々な企画・催しの一環として、新年一月三日に放映されたフジ系テレビドラマスペシャル「坊っちゃん」（「嵐」の二宮和也主演）に、「旧本館」安積歴史博物館の講堂や廊下が何度も出てきたのを御覧になったでしょうか。（校舎全景は、CGコンピュータグラフィックスで変に縮められてOBには不評だったようです。）漱石は明治二十八年四月から翌二十九年三月まで愛媛県尋常中学校（現松山東高校）に英語教師として勤め、この時の経験が「坊っちゃん」に描かれています。愛媛県尋常中学校（ドラマでは「愛媛縣松山中学校」）を想定した明治時代の校舎のロケ地として安積中学校旧本館が使われ、安積の五代校長横地石太郎氏（明治二十六年三月～十一月）は、その後、愛媛県尋常中学校の第八代校長（明治二十九年二月～三十一年十一月）を務めましたので、漱石と横地氏は松山で共に過ごした期間があるのです。こうして、築百二十七年になる安積旧本館という建物と横地校長を介して、安積と松山、そして漱石は繋がってくるのです。（このことは、安積百周年の際の地元紙（福島民友、福島民報）の記事で知っていたはずなのですが、安積歴史博物館の事務局長橋本文典氏（八十四期）に改めて教えていただきました。横地氏は金沢藩士出身、開成学校から東京帝大理科（化学）を卒業。前任の住田昇校長が排斥運動で辞職した半年後に嫌々校長を継いだとされます。校長として漱石と重なるのは明治二十九年二月から三月迄のわずか二か月ですが、横地氏は明治二十八年頃、松山中学の教務主任、教頭を務めたとされるので、漱石と横地は約一年間を一緒に過ごしたことになります。横地氏は、後に山口高等商業学校（後に新制山口大学経済学部）の構成母体となる）の校長となった実力のある教育者だったようです。近藤英雄「坊ちゃん秘話」（昭和六十年）によれば、中学の主席教諭西川忠太郎、沢幸次郎、中村宗太郎、横地石太郎等、複数の人物が赤シャツのモデルとされました。漱石自身は「私の個人主義」の中で「当

時其中学に文学士と云つたら私一人なのだから、赤シャツは私の事にならなければならん」と語っているが、これは赤シャツが漱石自身というよりも、若い教師たちから文学士である自分が煙たがられていないかといった不安の反映であると同時に、東京帝大出を鼻にかけて権力を振りまわすようなことが教育界にあつてはならないことを同窓に警告しているとする説もあるようです。）こうして、築百二十七年になる安積旧本館という建物と、横地校長を介して安積と愛媛松山、そして漱石は繋がってくるのです。

ところで、松山東高校の歴史は大変古く、明治十一（一八七八）年愛媛県松山中学校と改称、この年を創立年としているので、安積よりも六年古いのですが、更にそのルーツを辿ると、文政十一（一八二八）年、松山藩主松平定通が設けた藩校「明教館」にまで遡ります。この講堂は、昭和十二（一九三七）年、旧松山中学校の敷地の一面に移築され今日に至っているのですが、松山中学の本館・講堂等は昭和九（一九三四）年に火災で焼失したため、明教館のみが明治の雰囲気を保っています。この学校で、正岡子規や秋山好古（陸軍大将、後に北予中学（現松山北高）校長を務めた）・真之兄弟等多くの著名人が学びました。秋山兄弟と言えば、NHKスペシャルドラマ「坂の上の雲」（二〇〇九年十一月二十九日から二〇一一年十二月二十五日まで足掛け三年に亘って放送された）ですが、その時も安積旧本館でロケが行われました。

余談になりますが、安積も高山樗牛や朝河貫一博士、二代続いた京都大学総長（新城新蔵・小西重直）、芥川賞作家三名を輩出する安積の他には、都立九段高校（安岡章太郎ら、現千代田区立九段中等教育学校）、都立日比谷高校（庄司薫ら）、私立麻布高校（北杜夫ら）の全国で三校だけと聞いてます等、多くの素晴らしいOB・OGがいますが、松山東高校出身者も多士済済です。

漱石門下の安倍能成を始めとして、「ノボさん」こと正岡子規からの流れもあり、河東碧梧桐、高浜虚子、中村草田男、石田波郷等の俳人が多く、他にもノーベル文学賞受賞の大江健三郎や早坂暁らの小説家・脚本家を輩出。更には映画監督の伊丹十三、「太陽にほえろ！」の山さん役で知られた俳優露口茂らも。マスコミ関係では、コラムニスト天野祐吉、武内陶子・首藤奈知子（NHKアナウンサー）らを輩出しています（ここでは紹介しきれませんが、アナウンサーの多さには驚かされます。）また、安積と同様、「文経武緯」を掲げて高いレベルの文武両道を目指しており、昨年春の甲子園に二十一世紀枠で出場したことを覚えている方もいらっしゃるでしょう。安積も松山東高校に続いて、二度目の甲子園で校歌や「紫の旗」を歌いたいです。

今回、松山関連の話題が多くなってしまいました。御存知の方も多いと思いますが、実は仙台と漱石とは強

い繋がりがありますので、そのことに少し触れてこの稿を終えたいと思います。東北大学附属図書館には「漱石文庫」があります。図書館ホームページによりますと、夏目漱石の旧蔵書、日記・試験問題・原稿等の自筆資料、その他漱石関係資料等から構成されており、漱石旧蔵書のほとんどを収め、洋書約一六五〇冊、和漢書約一二〇〇冊の図書が文庫の中心で、洋書の中には漱石が英国留学時に購入した約五〇〇冊の図書も含まれているのとです。この文庫が東北大学に譲渡されることになったのは、当時の附属図書館長で、漱石の愛弟子でもあった小宮豊隆（一八八四～一九六六）の尽力によるところが大きいとされています。搬入は、昭和十八年（一九四三）から始まり、昭和十九年三月に完了しました。漱石山房があった東京の早稲田南町は、昭和二十年三月十日の所謂東京大空襲（下町空襲、死者十万人以上、罹災者百万人以上）で焼けましたから、この漱石研究の重要資料は、仙台の地に移されたことで焼失を免れたことになります。

（因みに、昭和四十六年（一九七一）に『漱石文庫目録』が作成され、また、仙台文学館（青葉区北根）開館に伴い、仙台市と共同でマイクロフィルム化を進め平成九年度末に完了しているようです。）

今年、安積は百三十二年目の歩みを進めます。「七州の覇」と称えられるに相応しい安積高校にしていくことが、多くの安積の先人たちへの恩返しと考え努めてまいりますので、これから皆様からの温かい御支援を賜りますようお願い申し上げます。